

地域政策研究<第2号 2000 No.2 Volume 2>

「地域マネジメントシステム（RMS）の基礎研究」

[要 旨]

地域の自立的発展のために、NPOや住民の参加などを想定し、地域の環境や資源を次世代に引き継ぐとともに、それらを利活用して、「持続可能な開発」を実現することが求められている。そのために、各種主体が地域に立脚し知恵を出し合うだけではなく、行政界や都市部・農村部、陸部・海部などのBoundaryを超えた「地域」において、複数のプロジェクト等の影響評価を行い、複数の意思決定者や各種主体が共に依拠でき、コンセンサスを形成しながら利害を調整し運営していくための広域・複合評価の客観的な仕組みが必要である。

各地域のCapabilitiesを発見し選択肢を増やすとともに、環境問題などのマイナスの影響を減少させるため、また、地域資源管理の観点からNPOや住民の参加を促進するためにも整備されるべきものが、地域マネジメントシステム（RMS）である。

RMSは、過去の環境・地域資源の評価・管理（手法）の歴史をふまえ、具体的な手法としてマクハーグ（Ian L. McHarg）の提唱したEcological Planningを用いる。この手法は、Capabilitiesによって認識される地域資源の特定の利用に対して有するOpportunities and Limitationsを把握することで、適性な資源利用をおこなおうとするものである（Suitability Analysis）。これをISO14000sや行政評価の流れの中に、経営モデルとして組み込もうとするものである。

地域マネジメントシステム（RMS）は、Sustainable Development（生態系の支
持力・許容力の持続と 人間の事業・活動の持続の両立）への要請が高まる中で、地域の政策決定において資源評価を組み込む具体的な手法、あるいは、適切な管理手法を提案するものであり、本論文は、今後、具体的に実際の地域におけるケーススタディを行っていく際の理論的背景と位置づけを明らかにしたものである。

Key Words: Boundary、Capabilities、Ecological Planning、
地域マネジメントシステム（RMS）、地域資源、
Suitability Analysis、Sustainable Development

[執筆：杉原弘恭・八城正幸]